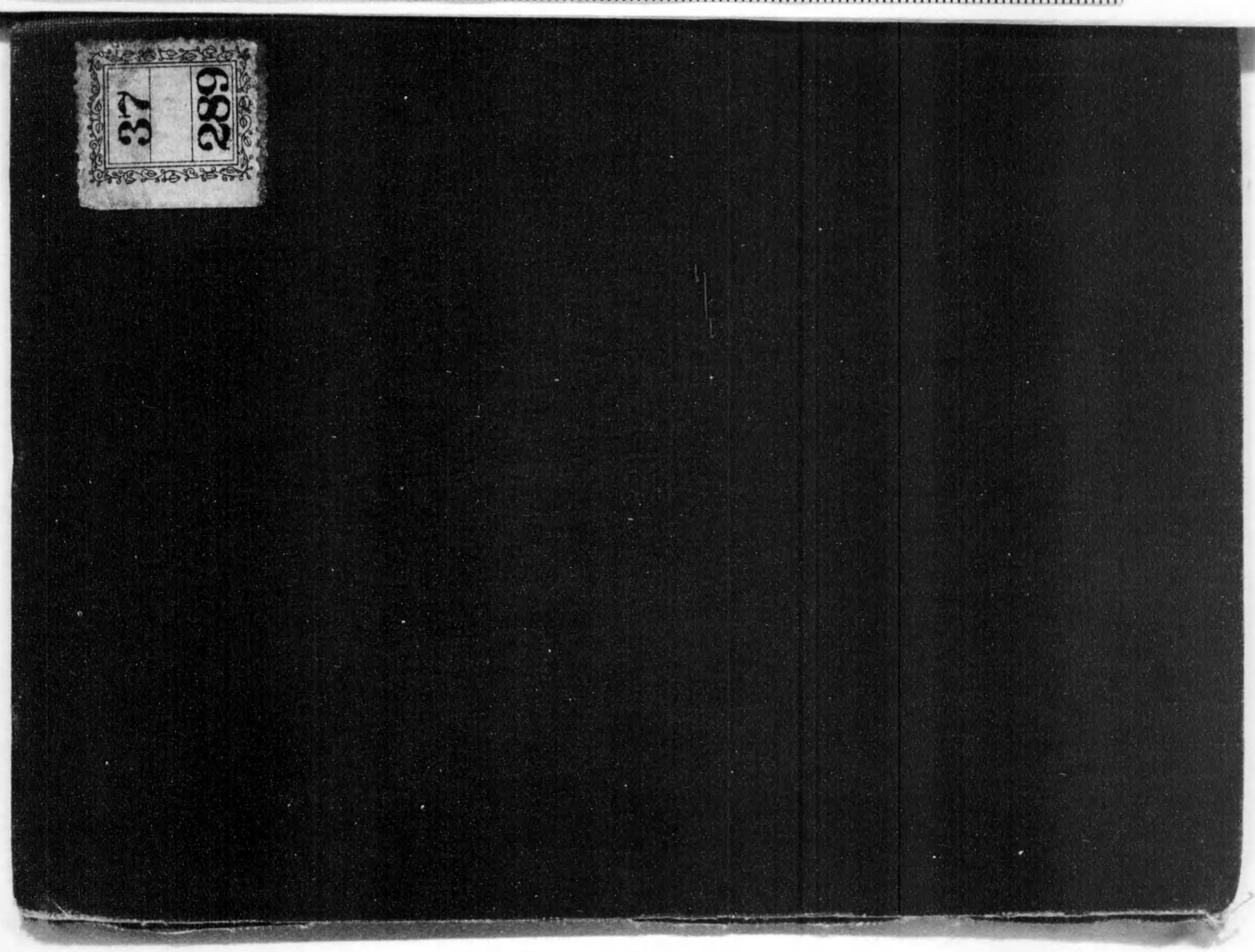
37
289

37—289

大正
3. 6. 1
内交

木下利玄歌集

銀

大正三年五月十五日

我が亡き子利公に

目次

みちのくにて……二
濁り川……一四
晝間……二三
肌身……三六
旅の雪……五二
糸くづ……六〇

粉雪……七六
落葉樹……八六
地面……一三四
利公の爲めに……一四二
夏……一六六
指の傷……一八〇
夕方に……一九〇
恋……二〇〇
紐……二一四
あかり……二二四
八つ口……二三八

みちのくにて

みちのくの一の關より四里入りし暇に日暮れ
螢火をみる

賊住みし窟(いはや)に近きみちのくの水田の畔に燃ゆ
るほたる火

みちのくの石原道に日は暮れて搖るる俥に螢
とびくる

たそがれのあかるさも消え肌さむみ心つつし
み俥にゆらる

長雨がやみてみたればしみじみと秋はわれら
に交りあたり

今われは何よりもこの山上の楓の肌にしたし
めるなり

山深み草木しげる草木がわれにせまり來われ
にせまり來

障子あくる音かろらかにすみたれば椽の日ざ
しに心よるかも

こまやかに夕べの冷えが身にそひて初秋の山
にさしぐみにけり

夜がくれば「御晩になりした」と云ふ挨拶をとり
かはしつつ灯をともすなり

山里のかたまりあへる四五軒が道さしはさみ
夜の灯ともせり

なじみつる温泉の村をすてまた知らぬ山めぐ
る里の夕ぐれに入る

東京を遠く南に感じつゝ白石町をとぼとぼあるく

濁

り

川

○桐の花雨ふる中を遠く來し常陸の國の停車場
に咲く

あづまぢのみちのはてなる祝町のくるわを雨
にぬれてゆきすぐ

板の間のくらきに晝の遊女ゐしを見つゝ我が
身は行きすぎしなり

雨後の晝を水戸市に入ればひた〳〵と水にごりみてる路傍の小川

棹にほす子供の着物うつりたる雨後の塲末のうす濁り川

公園の梅林の青葉がくれの青き實のその晝われにしたしみしなり

いましがた我が身のありし丘をよそに汽車は
汽車とて走せすぎにけり

書間

牡丹園のすだれをもれて一ところ入日があたり牡丹默せり

わが瞳華美にびゝしくとらへつゝおし默りゐる胴慾な牡丹

本所錦糸堀のたまり水に日暮れ闇はひ風のさむしも

黒い工場とたまり水の間にたそがれの白き道
あり人力走りすゝむ

生きものゝ身うちの力そゝのかし青葉の五月
の太陽が照る

甲羅虫草の葉ずゑにつるみたり野原の露は晝
ぬるみつゝ

核(たね)かづき黑土いづるこの芽生へまことにこれ
は力持てるよ

綠葉の陰に嬰兒(えいじ)の足の指ならべみ山すゞ蘭花
もちにけり

ほの〳〵とわがこゝろねのかなしみに咲きつ
づきたる白き野いばら

夕がたの雨あたゝかく野いばらにぬれそゝぐ
なりなつかしいかも

目の前の日なたの地に來て砂あびる思へば雀
も可愛き小鳥

汽車道の赤土土手の白き花夏が身近にまたよ
りて來ぬ

窓ぎはのとある工女の二の腕の今日も今日と
てふとれるすべなさ

はづみある處女(をとめ)の肌のはねかへす物なくいた
み汗もつ晝間

をんなの春の肌身の汗ばみをむし暑くつゝむ
着物のおもみ

淫(たは)れ女が着ものしんなり湯上りのからだにつ
くる晝のこゝろね

見らるゝをひたひに感じうつむけるおぼこむ
すめのをんならしさよ

いちらしさ忘れもかねつ泣き居たる浴衣の胸
の乳のふくらみ

肌

有

西洋の繪紙にて幼馴染みなる空いろばなのみ
ちばたに咲く

太陽はあたゝかにあたゝかに母らしき愛を送
れり空色の花に

我が顔を雨後の地面に近づけてほしいまゝに
はこべを愛す

子供の頃皿に黄を溶き藍をませしかのみどり
色にもゆる芽のあり

年上(としうへ)の女の愛に身をつゝみあまゆるおもひ春
の夜に觸る

春の夜のあまきうるほひこそばゆく指尖(ゆびさき)に來
てくちづけをする

この君のふところぬくきにほひよりわれつゝ
むらむこの母らしさは

足ひろげ男ををどる彼の女こそこよひのむね
をいたがゆくすれ

山王の櫻しらみて夕ぐれのものはかなさに我
が身のひたる

茶屋女身をすてばちのあゆみぶりさくらしら
みてひゆる夕方

赤坂の茶屋に三味なり灯がともり山王の櫻は
つめたくしらみぬ

人歸りさくらしらみてくるゝなりわが身ひと
つはいかにすべけむ

芽ぐむ木にめぐられて立つ木ぼ何も云はねど
何か何かそゝらる

高き木の新芽見あぐるわが肌の汗ばみいとし
夏の秋波

我が顔に青き光を受けながら藪かげ草の肌身
をのぞく

足袋ぬげば春の皮膚と我が素足もつれあふこ
そわりなかりけれ

つゝましく君は小さき手をあらふ好きなその
手がおとなしく濡る

食卓の牡丹の花に見入りつゝ四月二十日の晝
とあひみる

そゞろなる浮氣娘の襟あしの生へぎはにくむ、

食卓の藤

思ひつめわがかなしみのほそるなり新芽(しんめ)に霧

のひゆる夕方

旅

の

雪

旅に來てはじめての夜のさびしきに明くれば
降れる山里の雪

朝の雪谷間の石につもれるを温泉(ゆ)のガラス戸
によりそひて見る

納屋(なや)の屋根の畫の雪どけ四十雀いくつも前の
木の枝になく

向ふ岸の崖の日なたの南天の赤き實よ實よさ
なむづかりそ

殘る雪青白みつゝ浮べるを日くれわびしくう
ちまもるかな

磯町の床屋によりて髭剃れば鏡にうつり霰ふ
るなり

去りがてに蜜柑畑をさまよひぬひくゝしげれ
る緑したしみ

俥走り黄色の蜜柑後(あと)になり温泉(ゆ)の町さかる胸(むね)
つぼらしさ

糸へう

やゝ疲れ膝くづしつゝ窓による顔の上氣のに
くき女よ

のぼせたる頬の紅のにくゝして君に奪らるゝ
我が心かな

腕にからむ紅き縮緬つめたさと重さおもへば
君のいとしや

心行きて指尖となりなでゝゐる女のまろくし
ろきたゝむき

工女たち工場の前の空地にて日の目をみつゝ
遊ぶあはれさ

ゾリッヂの赤き絲くづ人ふみてなほのこりゐ
る赤き絲くづ

村だけの心をつくし祭禮する人たちの上に秋
空くもる

うき〳〵と屋臺の上に神樂せし人等いぢらし
雨降りいでぬ

さゝやかなる八兵衞稻荷の祭禮の二日目の今
日も雨が降るなり

菊の中のうす黄の菊と咲き出づるこの草の上
もよそにはおもはず

普請場に材木を置く遠ひゞき病みて臥す日は
悲しかりけり

庭見れば土にしみ入りしみ入りて冷え〳〵雨
の降り出でしかな

雨雲のひまより夕陽うすくさし今日も暮れ行く臥しつゝ居れば

黒き虻白き八つ手の花に居て何かなせるを臥しつゝ見やる

遅くつきし湯元の宿のくらき灯にわれ等の食べし黒き羊羹（日光の旅を憶ふ四首）

くらき灯にわれ等居群れて冷えし手を火鉢に
よせし湯元の宿屋

やゝ胸の悪き氣もちに仰向きし湖上の舟も今
はなつかし

馬返し蔦屋の椽に暮れてよりやすみし時のひ
もじき氣持

敷き居たる野邊の草寢て起きもあへぬそのす
なほさもみすてかねつゝ

野は夕日百姓たちは黒土に鍬を打ち入れ打ち
入れやまず

黒土をほればひそめる百合の根に冬の日ざし
のまつはりに來る

粉

雪

明治屋のクリスマス飾り灯ともりてきらびや
かなり粉雪降り出づ

きげんよくあびそてゐしが女の子たふれころ
びぬかたき大地(だいち)に

冬の日は壁と地面(ぢめん)の直角に來りたまれりそれ
がよろしき

學校に初めてわれの入りし時廊下にかなしく
自家をおもひき

門口にお鶴人形は膝なでゝめぐみもふかき……
……とうたひ居しかな

大わた小わた日の暮れ方のうら寒み綿着て飛
ぶか悲しい虫よ

夕月にみんなの影のうつり居る地をなつかし
み踏み〳〵遊ぶ

遲くなれば月きら〳〵とやさしさのなきも悲
しく自家に歸りき

眼さむれば隣の室のはなし聲そはわが上にか
かはるらしも

目に白く雪の見えつゝ冬くればいよゝしたし
き軒ちかき山

落

葉

樹

蕎麥の花しら〳〵咲けり山裾の朝日のさゝぬ
斜面の畑に

埼玉のとある小村の停車場の柵(さく)のダリヤに秋
の陽(ひ)あつし

日光にちかき停車場杉の木の暗きが前にコス
モス光る

文挾の停車場の前に一本のあかるき黄色の秋
の木立てり

霧の粉空氣にまじる林間をつめたき手してい
そぐ旅人

うち向ふ山の傾斜のしみ〴〵と目にしみ入り
てかなしき夕べ

黒き山へ夜の湖水こえ灯の色の月落ち行けり

心をのゝく

隣室のサノサ節いともものかなし湖水の岸の朝の旅籠屋

落葉樹葉落つる前の黄色なる森のあかるみわれらよこぎる

枝はなれ枯葉たゞよひ木のもとの大地(だいち)につき
ぬなつかしいかな

姉たちの乘り來し俥この宿の帳場の前に並べ
るさびしさ

湖(うみ)じりの山あか〳〵と入日する湖水をわたる
舟の旅びと

子供泣く暮るゝ湖水を渡り行く舟なる乳母の
ふところに居て

男體の山のくづれのあらはなる土に夕日のさ
せるあはれさ

男體のうへの青空しろき雲山の秋の日おだや
かに暮る

舟上(あが)る湖水の岸のいさゝかの畑の野菜(やさい)をなつかしむかな

瞳吸(ひとみす)ふ青き野菜(やさい)に目をまかせ夕べつめたき湖ぎはに立つ

白樺のしろき木の肌森を行く夜の旅人のまみにつれなし

月になる夜の山路のつめ(た)きに姉の聲などしたしみてきく

夜道行くわれ等の後(あと)について來る子供なつかし何處に行くや

ちやうちんに昔噺の情調をなつかしみつゝ夜の旅をする

森の家灯をなつかしみ立ちよれば親子集ひて
火をぞ焚きける

夜道するわれ等いとしも樅の木の深林を出で
湖添ひを行く

山上の温泉の湧く村の十月の夜の灯にせまる
寒き山の氣

山の温泉の古旅籠屋の障子のみしろく目に入
る朝のさみしさ

旅籠出でゝ山にむかへば冬の息山にかゝれり
旅ごゝろ泣く

山の木々沼尻の木々も冬らしくくもれる空の
底に並み立つ

山の木々黑き黃色きかさなりてわれ一人を見
下すさびしさ

山したひ山に來ぬればふと切に淺草などのし
たはしきかな

榧に似しむくつけき木がしほらしき赤き實つ
けて秋の日に立つ

熊笹のうす黄が纏ふ山の上の濃き藍色の空の
するどさ

空の藍山の黄色のくつきりとかたみにせめぎ
秋晴に立つ

山火事に焼けたる木立白光る山のうへなるは
つ冬の空

白樺の白き木肌に手をふれて眼を見ひらきぬ
秋風をきく

落葉ふむ足をとどめてたゝずめば沈默(しゞま)ひろがるまた歩み行く

旅人の行く道さきにさゝやきてかなしみをよぶ落葉樹かな

葉も花もすがれ果てたる秋草のなほ立てるあ
り山の道ぱた

しばらくは瀧に心を吸はれつゝ秋の日なたに
われ等たゝずむ

うつくしきひだをつくりて流れ行きながれ行
く水に愛をおぼゆる

石楠木が蕾の用意早なりて山ふところの日だまりに立つ

落葉松の山をくだりて水ひかる高原に出づや頭痛する

砂みちに空氣草履の内輪なる足跡のこるなつかしさかな

パラソルに秋の日光る眼の痛さやゝ疲れつゝ
高原を行く

大いなる斜面に秋の日を受けて男體山の夕ぐ
れに立つ

男體の樅に紅葉に午後の日の弱まりて行く暮
のしづけさ

日光の宿のおばしま軒ちかく山高まれるなつかしさかな

日光を二時間の後(のち)われ等去るおもひさびしみ御霊廟(たまや)を出づ

鹿沼にて姉にわかれし汽車の中のそゞろにさびし野の靄を見る

日光は次第に遠み過ぎ去れる旅のかなしさ野
ずゑ汽車行く

野原ややなぞへになれり夕月の光たまるを汽
車より見やる

寒き夜にかたまりあひて急ぎたる戰場が原の
思ひ出かなし

埼玉の小停車場に汽車とまる橙(だいだい)いろのまばら
なる灯よ

東京に近づく汽車に日は暮れて埼玉あたり野
の灯さびしも（大正元年十月）

地ぢ

面めん

天氣よき日曜の朝の勸工場日陰つめたく秋を
感ずる

ネルに着る袷羽織の甲斐絹裏つめたき光澤の
さびし雨の日

わが心森の緑に浸りつゝその言ふことに醉へ
るさみしさ

橋の影うつれる河の洲に咲ける芹の小花の白
のかなしさ

水の音に心撫でられおとなしくあまやかさる
丶流のほとり

遠く行く夜汽車の窓の暗き灯のいくつも過ぎ
ぬ踏切に立つ

何處にか子供の遊ぶ聲きこえ樹陰(かげ)の闇の身じろぎもせぬ

膝折りて濕(しめ)りを持てる土の香をかげば子供の遊びなつかし

をんなの子かごめ〳〵を聲々に唄ふはかなし町の夕闇

少年の記憶かなしも遊びすぎて闇のせまりし
ぬりごめのかげ

汽笛吹き羅苧屋の車街とほる晝のこころのな
ごむ土曜日

四十雀頰のおしろいのきはやかに時たま來り
庭に遊べる

女の子頰ずりしたし鷄頭の毛糸の手鞠咲き出
でにけり

鷄頭の黄いろと赤のびらうどの玉のかはゆき
秋の太陽

◎羽織着る君が素足(すあし)の冷たさのかはゆさいたみ
胸にまつはる

そらしたるまなざし追へば追はれつつしばた
たき居るまみのうるほひ

今しかた茶の間の時計十うちぬ厨にあまねき
秋の光線

ダリヤ咲くさけばさきたるさみしさに花の瞳
の涙ぐみたる

疲れたる光の中にコスモスのあらはに咲ける
午後頭痛する

コスモスの花群がりてはつきりと光をはぢく
つめたき日ぐれ

青き靄灯ともし頃の冷え〳〵とすこやかなる
身の食慾そゝる

菊切れば葉裏にひそむ虫のありうごきもやら
ぬこの哀れさよ

森の鳥わがかなしみに針さして鳴く聲いたし
山をあゆめば

利公の爲めに

あすなろの高き梢を風わたるわれは涙の目を
しばたゝく

愛らしき眼を見はりつゝ息づける苦しき様を
見るに堪へかぬ

人皆に見捨てられたる床の上にわがをさな兒
が眼をひらきゐる

人目なき處に妻とかくれつゝ泣きくづれなば
やすからましを

夏の中にひそめる秋を感じつゝ涙ぞいづる子
の死にし後

程もなく秋くることのわびしさと面やつれせ
し妻しのび泣く

子を失ふ親の悲みそは遠きことゝ思ひしを今
日われに來し

待ち居たる九月の末は未だ來ず早くわが子は
死にて世になし

脇差のすこしぬきたる刀の上に蓮華ぞうつる
凶事ありし室

おとなしき死顔を見れば可愛さに口きかずと
も傍に置きたや

顔のうぶ毛腕のうぶ毛の可愛さよいく日の後
も眼に殘るべく

やはらかくをさなきものゝおごそかに眼つぶ
りて我より遠し

うけ口のくちびるの色變れるに水をそゝぎて
見つめ見つむる

汝が母は看護(みとり)もせずに別れたり母も子供もか
なしかるらむ

人々を力なき目に見まはせし汝がいぢらしさ
忘れかねつも

汽車の笛遠くひゞきて夜はふけぬ我が子の傍(そば)
に通夜して居れば

いとし子のつめたきからだ抱きあげ棺にうつ
すと頰ずりをする

友禪のをんなのごとき小袖着て嬰兒(えいじ)は瓶の底
にしづみぬ

父母の涙ぬぐひしハンケチを顔にあてやり棺(ひつぎ)
にをさむ

小さなる笠よ草履よはた杖よ汝が旅姿ゑがく
にたへず

人形を相手となしてな泣きそ雨そぼふりて寂
しき夜も

安らかにあれかし今はわが力及ばねばたゝそれのみをこそ

木の繁る上野の奥の土しめる谷中の墓地にわが子葬る

墓地の杉蟬はなけどもいとし子は姿も見えず土に入りつゝ

寺の門敷石の上にさくら木の黄なる葉散れり
晩夏の日照り

子の生れ子の死に行きし夏すぎて世は秋となり物の音すむ

遠方に鍛冶屋かねうつ音すみて秋やゝうごく
八月のすゑ

曼珠沙華か黑き土に頭(かしら)あぐ雨やみ空のすめる
夕べに

墓ならぶ谷中の墓地に利公も小さき墓標を立
ててねむれり

若き母頭(かしら)痛むに手を當てゝむかふわが子の墓
標の白さ

線香の煙墓標をめぐれるを二人ふりむき去り
がてにする（大正元年八月——九月）

夏

初夏の眞晝の野邊の青草にそのかげおとし立てる樫の木

踏切をよぎれば汽車の遠ひびきレールにきこゆ夏のさみしさ

菊に似し白き小花をおほくつけ夏草しげる汽車みちの堤

駒込の停車場に來ればあはれにも萩のにほへる七月の末

汽車とまり汽車の出で行く停車場のダリヤの花の畫のくたびれ

草堤(くさどて)の茅(かや)が根もとに野いばらの白く泣き居る夏の停車場

夏草のにほひの中にたゞずみて物思ひ居れば
日のかげろへる

夏草のしげみがなかにうつむける鈎鐘草のよ
そ〳〵しさよ

白き指に紅のにじみてなまめけるにほやかさ
もて咲く葵かな

ぐらんどの手植ぎよくらん東京の上野の夏を
さびしらに咲く

何の木に咲ける花にや水無月の夕ぐれ君の門
ににほへる

うちしめり街のごとめききこえ來る山の手町
はかなし夏の夜

茶屋女うちは持つ手の汗ばみの晝のけだるさ
きり〳〵すなく

恐ろしき黒雲を背に黄に光る向日葵(ひまはり)の花見れ
ばなつかし

くろみもつ葉ずるに紅き花つくる莢竹桃の夏
のあはれよ

からみあふ花びらほどくたまゆらにほのかに
揺るゝ月見草かな

指

の

傷

わがこゝろかきみだされて胸つまる君が小指
の白き繃帶

より添へばヨードホルムのうす甘きにほひ皮(は)
膚(だ)に惱ましく泌む

可愛さのわれなやましむ君がせる指の繃帶白
くかなしく

風觸れず指尖熱き繃帶を君苦にしつゝ寢ねがてにする

なやましき夜の寢ざめに肉體を切に感ずる指の傷かな

指尖に身うちの熱のあつまりてうみ持つ傷の痛むあけ方

繃帶の白きもすこしよごれつゝ憎さもおぼゆ
可愛さのはて

君泣けばかの繃帶のよごれめのいよ〳〵我を
吸ひやまぬかな

強き日にさすパラソルの日蔭の柄を握れる指
の白き繃帶

指尖(ゆびさき)の傷の痛みにひゝけつゝ市街(まち)の電車のき
しるわびしさ